

教員インタビュー

甲子園学院小学校 副校長

米田 浩 先生



敬遠されがちな 「プログラミング」も ピラーで親しみやすく

■プログラミング教育に 取り組み始めたきっかけ

もともと小学校教員で、中・高の専門も社会科なので、情報や技術の専門性はありませんでした。しかし、当時の同僚とパソコンや教材を買って、プログラミングを組んだり、授業で使ったりし始めました。

現在はScratchやプログラミンなど、様々な教材を使っています。コード・A・ピラーの実践については、SNSの情報教育に関するグループから情報を得て知りました。授業やクラブ活動の導入などで、コード・A・ピラーを用いて指導をしています。子どもも盛り上がり、楽しそうに活動していますよ。

■プログラミング教育の課題

小学校教員を対象にしたプログラミング教育に関するアンケートでも、「自身がプログラミング教育を行うことに対して不安がある」と回答した人が98%であると調査で明らかになっています。私は様々な教材に触れたことがあったので、意義や取り組み方なども腑に落ちましたが、やはり一般の方に受け入れてもらうのは難しいと思いますね。

小学校には今までプログラミングに関する教科等がなく、ロボットなどの教材・教具も導入されていないことが多いため、コード・A・ピラーは、先生にとっても、子どもにとっても、入門の段階で使えそうですね。



■コード・A・ピラーを使った授業での取り組み

コード・A・ピラーで組めるプログラミングは「順次」と「繰り返し」の2つです。プログラミングは、教室などで習っている子はできるけど、そうでない子では難しいと感じてしまうこともあります。しかし、グループで課題に取り組みさせることで、一緒に考えて取り組むことができるようになります。

また、最初は難しくても、他のグループの意見も参考にしながら組んでいくことで、目標の達成に近づきます。ちなみに、この「他グループの意見を参考にする」という工夫は、スクラッチなど、他のどんなプログラミング教材を用いるときにも有効な手立てだと思えますよ。



はじめは、どんな動きのパーツがあるかを提示し、どんなふう動くのかを見してみる段階から始めます。次に、カードを用いて、どのように並べればゴールにたどり着くのかを、グループごとに考えます。そして、考えたものを使って実際にピラーを動かすことで、考えたプログラムを修正し、ゴールへの到達を目指します。



■教材としてのピラーの魅力と今後のプログラミング教育

プログラミングは、初めに「難しそう」と警戒されずに、子どもに教材に触れてもらうことが重要だと思います。そこで、ピラーの「可愛さ」はとても重要なポイントです。

コード・A・ピラーそのものは学校に1台あれば、掲示用のパネル（写真上）やカード（写真左）を用意すれば、授業は十分に実施できます。低価格でわかりやすく、低・中学年も取り組みやすいですし、拡張パーツを用いれば難易度が上がるので、高学年でも対応できるでしょう。

パッケージ化した教材をうまく活用したり、発表された実践を見たりして、プログラミング教育をもっと広めていきたいですね。

Profile

よねだ ひろし
米田 浩 先生



甲子園学院小学校 副校長

尼崎市立小学校の校長を退職後、2018年度より、甲子園学院小学校の副校長に就任。

ITCE（教育情報化コーディネーター）2級